

スマトラ沖で発生した大地震と、その影響を受けて大津波の被害が出ているというニュースを知ったのは、西アフリカのダカールにいたときだった。一二月の終わりだった。「つなみ」という日本語をアナウンサーは、ときには「すなみ」と言って発音しにくそうだったが、繰り返すうちにだいたい定着していった。いっばうで、恐ろしい災害をあらわす日本語がグローバルに使われることに、いささか戸惑いを覚えなかったわけではない。その後、津波の被害者数は増えつづけるばかりである。行方不明者も含めて、いまだに被害の実態はわかっていない。

日本では、夏の水害・秋の台風・中越地震と、二〇〇四年は、やはり天災が多い年だった。天災は科学的情報と経験的な知恵で被害を最小にすることしかできないのに、私たちはわざわざ人為的災害の戦争を起こしている。そして多くの人間を死へ向かわせている。ちかごろの「天の怒り」は、スーパーパワーになったアメリカ合衆国の横暴に、目覚めよ、と警告を発しているように思えてくる。

イラクの戦争は、アメリカの経済的野望と政治的傲慢に起因する。またその側面的状況には、宗教・文化の異質性がある。簡単にいえば、「新世界」におけるアメリカ建設へと発展する、コロンブスの航海の背景にあった、キリスト教とイスラーム教の対立である。過去千年、キリスト教の言説があまりにも広く世界を支配してきたが、今いちど、私たちはイスラームの言説に耳を傾けるときではないだろうか。本号の特集は、イスラームおよびその文化表象が、地球上で、どのように展開また変化しているのかを知る目的で組まれている。

西アフリカのセネガル、マリでは、人口の大多数がイスラーム教徒である。これらの、アメリカ合衆国のアフリカン・アメリカンとは比べられない落ちついた明るい表情に、私は深く強く印象づけられた。もちろん奴隷制度というアメリカ合衆国の歴史的犯罪が、その違いの大きな原因であるが、また同時に、今日これらの平穏さのなかに、アフリカの文化の、そしてイスラームの影響を見ることができないのではないか。